

## 令和6(2024)年度 選考委員コメント一覧

### 黒瀬武史委員長（九州大学）

コミュニティ活動・住まい活動合わせて126件の応募を頂きました。優れた提案を多数頂き、審査員全員で大変悩みながら長時間にわたって選考しました。なお、今年度から、住まい助成の対象をより明確化し、住宅や歴史的建造物など建物を活動対象にするものは、住まい助成の対象として募集を行っています。また、選考のポイントとして「多様性」が追加され「子どもや若年層、高齢者など多世代の参画が行われるなど、多様性のある活動になっているか」という視点を明示しました。選考のポイントは、いずれも選考委員会において重点的に議論している点であり、応募される際は改めて確認頂ければ幸いです。

コミュニティ助成については、近年「居場所づくり」をテーマにした提案が増えていますが、対象とするコミュニティや活動を明確にした取り組みが高く評価されました。地域づくりには、本来、多様かつ多岐にわたるコミュニティが必要ですが、本助成の助成期間や助成金額は限られています。助成を活用することで、活動がどのように持続化するのか、次の段階に進むのかという点を、予算やスケジュールを踏まえて重点的に議論しました。

住まい助成では、地域の人口減少を前提に空き家だけでなく空き地の活用を包含した提案が増えたことが印象的でした。空き地・空き家いずれの場合も活動対象となる土地・建物が確実に利用できる準備が整っている提案が評価されました。

いずれの助成においても、営利活動と非営利活動の組み合わせ、人件費等の固定的な経費の支出は、選考にあたり毎年悩まされる点です。また、実績ある活動を支援すべきか、新たな活動を支援すべきかについても、議論を重ねています。現状は、上述の選考のポイントに基づいて選考していますが、新たな活動への小規模な支援や助言の提供も今後求められることなのかもしれません。

選考された21件（コミュニティ活動11件、住まい活動10件）の豊かな実践が、交流会や報告を通して、豊かな住まいとコミュニティを実現しようとする全国の活動にも広がることを願っています。

### 梅宮路子委員（日本ナショナルトラスト）

今年度の申請は、どの団体も地域の特性や課題を的確に捉え、地域にとって必要な活動を提案するもので、選考に苦慮しました。地域には様々な課題がありますが、特に地方の担い手不足は深刻です。近い将来、日本各地で地域の維持が困難になることが予想されますが、そこを見据えた提案は印象に残りました。また、設立したばかりの団体が多かったように思います。立上げ間もないことで、実行性等が十分でない団体もありましたが、それぞれの感性を活かした提案はどれもキラリと光るものがありました。残念ながら全ての申請を採択することは出来ませんが、今回の提案は大事な活動の「タネ」だと思います。この申請を機に、大事に育ててほしいと思います。

### 瀬田史彦委員（東京大学）

今年度、本公募の審査委員として初めて選考に参加させて頂き、全国各地で考案されている創意工夫にあふれた様々な住まい・コミュニティづくりのアイデアに圧倒された。

応募の中には、本財団による助成以外の他の財源、たとえば他の補助金やクラウドファンディング、また活動によってはサービスの対価となる料金収入などを想定し、多様な財源から持続可能な活動を目指そうとする、巧みな事業計画が多くあった。

他方、そうした他の財源が期待しづらい活動であっても、自分たちが持つリソース、たとえば自分たちが使用できる建物などのハード、自分たち自身を含む活動家・専門家・有識者のネットワーク、そして自分たち自身が活動できる時間を組み合わせた、迫力のある活動計画も多くみられた。

そして活動の内容も、これまで光が当てられていなかった人やものを対象としたり、これまでにない奇想天外とも思える創造的なアイデアが織り込まれているものが多くあった。

本財団の原則単年度の助成によって、こうしたアイデアが実現され、助成期間終了後も、活動が自立して持続可能な形で地域に根付いていくことを期待したい。

#### **竹沢えり子委員（銀座街づくり会議）**

日本中どの地域においても、「居場所づくり」は大切です。そのことに真剣に取り組む人たちがいて、多様な人々が集まれるように工夫がされていますが、多様性の中でもある特徴を持った人たちを集める活動に着目しました。そこを基点にして、どこまでコミュニティのネットワークを広げ、活動やテーマに社会性を持たせられるか、は各団体の今後の課題だと思います。また、制度では掬い上げきれない課題にコミュニティの力で取り組もうとする活動にも期待しています。それが制度改革までつながれば良いですが、つながらないとしたら制度側の力量不足のようにも感じました。地道に活動を継続していただきたいです。これまで実績を積み上げてきた団体には、具体的な課題を解決しさらなるステップアップを期待したいと思います。

毎年同じコメントをしますが、仮に助成対象とならなかったとしても、この事業への応募が自分たちの活動ビジョンと地域への眼差しの見直しとなり、他の活動との交流につながれば、それも大きな成果だと考えます。

#### **山田翔太委員（世田谷トラストまちづくり）**

私が審査で重視したのは「企画の具体性」と「地域課題の把握度合い」です。例えば「コミュニティの活性化」「地域住民の交流を生む」と書かれていても、具体的な手段（仕掛けや工夫）がなければ実行性に不安が生じます。細やかに地域課題を分析できているものは、住民の視点に立てていると判断しました。

申請の中には、まだ助成する段階ではないと感じられるものがありました。まずは自分たちのできる範囲で一步を踏み出し、そこから見えたもの・感じたものを手掛かりに次回の申請を検討ください。助成金は単年度の一時的な資金獲得です。地域と団体の状況とを鑑み、どのタイミングに助成金を投入すれば確実に活動を実行でき、最大限の力が発揮できるのかを見定めることが重要です。助成対象に選定されなかったとしても、申請書の作成を通して確実に前進しています。明確になった活動の方向性やネットワークを糧に、次につながっていくことを期待しております。

#### **渡邊義孝委員（風組・渡邊設計室）**

私たちはどんな団体、活動を支援すべきか。審査会では毎年、議論になります。地道に、成果を出して、地域住民に寄り添った活動を続けている団体か。いままで誰もやったことがない新しいチャレンジで航海に出ようとしているチャレンジャーなのか。今年はその両者がバランスよく並んだ結果になったように思います。活動地は北海道から沖縄にわたりました。

審査の中では、「助成終了後も自立的に継続できるか」「業務の根幹部分を委託してはいないか」「地元住民や当事者が主体的に関与するか」といった点が議論になりました。おしくも選に漏れた団体は参考にさせていただければと思います。

採択された皆さんの活動の更なる発展を祈念しております。

#### **松本昭委員（ハウジングアンドコミュニティ財団）**

今年も、地域への想いが詰まった126件の応募を頂き、誠にありがとうございました。そして、例年にも増して中身の濃い、熟度の高い申請が多数あり、これらから20件余を選考するため、多くの皆様にご質問やご照会をお願いし、ご協力を頂きました。

人口減少や高齢化を背景に、「互助」「共助」の劣化が指摘される中、空き家や空き地など利用を放棄したストックを地域総出で活用する地域の存続をかけた活動、孤独・孤立を深める社会的弱者に寄り添う活動など「待ったなしの活動」も相当数ある一方で、コミュニティを高めながら、あるいは活動を楽しみながら、地域の個性や誇りを育て磨く活動も多数ありました。

そんななか、私は、市民まちづくりの原点とも言える①多様な参加と協働、②地域密着性、③自立と持続への努力の3つが感じられる提案に共感を覚えました。そのため、「助成金が熱量ある活動を導き、活動の持続性や発展に寄与するもの」「活動団体の利益（共益）より、地域社会の利益（公益）に重きをおく活動」「地味ながら、住民の暮らしに根付いている活動」を優位とし、アイデアや着想は優れていても、活動計画が曖昧でスタートラインに立てていないもの、活動プログラムに具体性のないもの、地域や住民との協働が見えないもの、物品の購入で課題解決を図るものなどは後位としました。

地域まちづくりは、「約束しあう活動」から「賛同・共感を広げる活動」へと軸足を移しつつあります。多様性を認めながら、地域に共感の輪が広がり、耕すようにまちを育てる活動を期待します。

今回、生憎、助成に至らなかったご提案の中にも、きらりと光るものが多数ありました。僅かな差で選に漏れた応募団体におかれましては、ぜひ次年度も再チャレンジをして頂ければ幸いです。皆様の大いなるご活躍を期待したいと存じます。

（以上）